

研究分野のキーワード：日本語学、日本語史、文法史、構文史、条件表現

## 研究紹介

「雨降れば客なし」という表現は、もしこれを古文として読めば「雨が降るから客がこない」と捉え、現代文として読めば「雨が降れば客はこない（ものだ）」などと捉えることが一般的です。この違いは、一体、どうして、どのようにして生じたのでしょうか。

私たちは、すでに起こった二つのことがらが、何らかの意味で「因」と「果」の関係にあると思えば、そう思ったとおりに表します。たとえば、A「雨が降る」、B「お客さんが来ない」という二つのことがらが、AがBを引き起こす原因になったと思えば、AダカラBダッタと言うし、Aが起きたらたまたまBという事態になったと捉えれば、AシタラBダッタと言うでしょう。AはいつでもBの事態を引き起こすと認識すれば、AスレバBスルモノダを使いそうです。つまり、現代の我われは、二つのそれぞれのできごとが、どういう関係で成り立ちあっていると思ったかを、一つひとつ言い分けているわけです。

ところが、古文では、Aが起きると、順当に起きる関係にあるBを、A（已然形）バBのようにバで並べる方法だけを用いていたわけです。古文においては、単純明快な方法だったものを、どうして、現代文では複雑にしているのでしょうか。

このことを解決するためには、文字に残された昔の言い方をひたすら調べ、実際の使われ方の移り変わりを観察します。そのとき、日本語の歴史において起きたいろいろな情報と照らし合わせて、その変化が起きたしくみを広く説明できる道筋を見つけ出すのがポイントです。そうすると、どうやら、昔と今とでは、まず、文の作り方が違って、比喩的に言えば、二つのことがらを、自立性をもって、ゆるやかに並べておきやすかった段階から、一文としてのまとまりの中で、前と後ろをつなぐ方法へと推移している様子が見えてきます。そう捉えないと、説明がつかない、他のことばの変化が、いくつも並行して起こっていることにも気づき始めます。そんな、文の作り方が変わったと捉えざるを得ない状況はどうして起こったのか。そう思って、用例を見ると、ある時代から、ある条件の言い方をとても高い頻度で使うようになっていて、それによって、表現の体系・バランスが大きく変えられた時期が、その変化のタイミングと重なっていることがわかってきます。では、その条件の言い方を、どうして高頻度で用いるようになったのだろうか。それは、「因」と「果」という捉え方の「発想法」に、なにか変化が起きたということなのではないだろうか…。

ことばの変化を追いかけていると、問いは尽きません。ある表現の推移は、必ず、その表現を取り巻く響きあいの中で、起こるべくして起こっているからです。これらの膨大な問いを解くことに、少しでも貢献できることを願いつつ、日々の研究に取り組んでいます。